

創立者 ウィリアム・ブリス 大將 リンダ・ボンド (万国本営 英国 ロンドン) 日本司令官 吉田 眞 (救世軍本営 東京都千代田区) http://www.salvationarmy.or.jp E-mail: webmaster@salvationarmy.or.jp



世界をみつめて

〈フィジー〉洪水災害支援

今年に入ってから、フィジーでは洪水被害が続き、1月25日には西部行政区に自然災害事態が宣言されました。1月27日現在、フィジー政府発表によると、死亡者は4家族を含む6人、避難者は約4,600人、被災者は約32万人に上ります。

現地の救世軍は、洪水及び地滑りによって被災した人々のために、避難所を設置、また食事・飲料水の提供をしています。建物の下部が浸水した救世軍の会館では、被災を免れた上階に被災者を保護して支援にあたっています。この地域の農作物や家畜のおよそ50パーセントが被害を受けたと推定されます。新学期が始まる時期でしたが、学校は閉鎖されたままです。救世軍は被災した子どもたちの家庭に、学費補助や学用品の提供をしています。

〈ウクライナ〉寒波被害支援

ヨーロッパの大部分を覆った寒波により、ウクライナでは氷点下36度を記録し、120人以上の死者が出ました。首都キエフの救世軍は、6箇所の避難所で、防寒具や靴下を街頭生活者に配り、地下鉄や路上にいる人々にも温かい飲み物を提供しました。防寒具類は、寒波が来る前の、昨年12月と今年の1月に、防寒具募集を呼びかけて集まったものです。400kgの防寒具とブーツ、



160組の防寒用靴下、30枚の寝袋が寄せられました。ヤルタにある救世軍では、新生児とその母親を凍える寒さから保護し、シェルターを手配する支援や、出産期を迎えた妊婦に食事、乳児用品、衣服の提供や病院手配等の支援をしました。

〈オーストラリア〉洪水被害支援

クイーンズランド州とニューサウスウェールズ州の広い地域で起こった洪水災害で、何百人もの人々が被災しました。サウスウェールズの洪水は2月2日に起こりました。救世軍緊急支援チームは、直ちに、被災者や救援活動に従事する人々への給食活動を開始しました。クイーンズランド州で被害が大きい町々では、給食活動をおこなうとともに、生活必需品を救援ヘリコプターで運んでいます。瓦礫撤去や家の掃除もおこなっていますが、その作業が一段落した後は、家族や家財を失った人々への心のケアが必要となってきます。救世軍は、支援活動を継続し、それらの必要に応え続けていきます。



〈日本〉東日本大震災 被災者救援レポート (続)

東日本大震災から1年が経ち、救世軍では、被災地の復興のため、被災された方々のニーズに応える支援を継続しています。いくつもの大きな支援プロジェクトにも、海外(アメリカや香港)の救世軍からの支援金によって携わっています。

その一つである、仮設店舗街建設では、大船渡市の仮設店舗街に続き、2月25日に、宮城県南三陸町にオープンした「南三陸さんさん商店街」建設にも関わりました。救世軍は、駐車場整備、天気に応じて透明な素材の屋根が開閉可能な全天候型フードコート(床はウッドデッキ)、各店舗エアコン・障がい者用スロープ・看板・案内表示等、総額一億円を超える支援をおこないました。また女川町では、4月末のオープンを目指して30棟の仮設店舗を建設中です。これらの仮設店舗街建設支援には、アメリカの救世軍からの資金が用いられています。



大雪の中オープンした「南三陸さんさん商店街」

女川の漁協には昨年11月から30隻の作業船(10人乗り、1.7t)と14台のフォークリフト(荷揚げ能力3t)が贈られており、さっそく様々な作業に使われています。また、気仙沼漁協にも、作業用テントや潜水具などが5月までに提供されます。



女川漁協に寄贈されたフォークリフト

2月の末に、宮城県知事より、宗教法人救世軍に、現在までの救援・支援活動に対する感謝状が贈られました。

その他、福島県からの要請に応え、福島県から全国に広がって避難している被災者の方々へ、暖房器具などを贈るプロジェクトに、他の民間の支援団体と共に参加しています。

また、岩手県陸前高田市の広田保育園には、避難用スロープや給食用ワゴン(3台)、仮設住宅でのコミュニティ作りのために、ミシンやソーイングセットなどを提供しました。

日用品配布ボランティア募集

4月から11月まで毎月1回、月曜日、東京・大手町の常盤橋公園でおこないます。

詳しくは、救世軍本営 社会福祉部まで
TEL: 03-3237-0865



救世軍とは
The Salvation Army

世界百二十四の国と地域で活動するプロテスタントのキリスト教会です。

一八六五年、メソジスト教会の牧師だったウィリアム・ブリスが、英国・東ロンドンで働きを始めた。

貧しい人々、仕事のない人々、搾取されている女性たち、教育を受けられない子どもたち、アルコールに溺れる人々などに、救世軍は実際の支援の手を伸べて、神の愛を伝えました。ニーズに応じて、食料配給所や職業紹介所、救護ホーム、簡易宿泊所、診療所などをつくったり、パンや肉、コーヒーなどを廉価で売ったりして、その働きを拡大していききました。

また、様々な支援活動に迅速に対応できるように、軍隊流の組織を取り入れ、アルコール依存症者の回復支援に取り組んでいる団体として、信徒はアルコール抜きライフスタイルをとりました。

日本での働きは一八九五年に始まりました。社会や人々の様々な必要に応じて、廃娯運動の推進や結核療養所の設立など、社会福祉・医療分野で先駆的な働きを起してきました。

現在は、伝道の拠点である四十六の小隊(教会にあたる)と、十一の分隊(伝道所にあたる)、十九の社会福祉施設、二つの病院(ホスピス併設)を通して働きを進めています。

<p>発行日 毎月一日・十五日</p> <p>発行部数 毎月一五〇部</p> <p>定価 一冊一〇〇円</p> <p>印刷所 救世軍本営</p>	<p>発行日 毎月一日・十五日</p> <p>発行部数 毎月一五〇部</p> <p>定価 一冊一〇〇円</p> <p>印刷所 救世軍本営</p>	<p>発行日 毎月一日・十五日</p> <p>発行部数 毎月一五〇部</p> <p>定価 一冊一〇〇円</p> <p>印刷所 救世軍本営</p>
--	--	--

(取扱支部) 救世軍は、統一協会、エホバの証人、モルモン教ではありません。これらの問題でお悩みの方は、右救世軍にご相談ください。

(この欄に通信文を書くと第三種扱いになりません)



Good News for Japan

平成二十四年四月一日発行
昭和二十二年一月二十四日(第三種郵便物認可)

明治二十八年創刊 毎月一日・十五日発行

復活の新しい力

宇賀神弘



今年のイースターは4月8日です

イースターは移動祭日です。春分の後の最初の満月のすぐ後に来る日曜日となっています

毎年春に、世界中のキリスト教会は、イースター(復活祭)をお祝いします。「神は、その独り子をお与えになつたほどに、世を愛された。独り子を信じる者が一人も滅びないで、永遠の命を得るためである」(ヨハネによる福

音書3章16節)とイエスは教えています。神は、永遠の滅びがどれほど過酷であるかをご存じです。そのため、神の独り子イエスは、人の滅びの要因である罪より人を救い、永遠の命を得られるよう、身代わりとなつて十字架に

死に、三日目に復活されました。この復活を祝うのが、イースターです。

復活したイエスに最初に会つたのは、マグダラのマリアという女性でした。彼女はかなり裕福でしたが、かつて七つの悪霊に悩まされ(身体的・精神的病を患い)、孤独、不安、絶望に陥り、悲惨な生活をしていました。しかし、イエスによつて病を癒され、暗闇から救い出された上に、他の女性たちと共にイエスに仕えるという、人生転換を経験していました。

ところが、その救い主イエスが、マリアの目の前で十字架にかけられて死に、墓に葬られてしまったのです。しかも、葬られて三日目一週の初めの日の明け方に墓を見に行くと、封印されていたはずの石が取り除かれ、イエスの体はありませんでした。彼女は失意の余りにただ泣くばかりでした。

私は十二歳の時、母を心臓麻痺で亡くしました。わずか一時間余りの患いで急死してしまつたのです。ショックを受け、私は母の遺体にしがみついて号泣しました。土葬された墓の前でも泣き、喪失感、死の前

における無力感、いずれ私も地上から消え去るのだという事実に向き合わされました。しかし同時に、そこは人の生き方を考える場所ともなりました。

さて、マリアが泣き崩れていると、背後で「マリア」という声を聞きました。彼女は、それが主イエスであると気づき、イエスが復活したことを知つて、「ラボニ」(先生)と答えました。その途端

今までの悲しみは消え、マリアは非常な歓喜に満たされました。そして弟子たちのところに行つて、「わたしは主を見ました!」と告げたのです。その後、復活のイエスは、弟子たちに十回にわたり現れ、復活の確証をされたのです。

イエスは罪に勝ち、死に打ち勝ちました。死は終わりではなく、新しい命の出現を意味するものとなりました。イエスの復活は、人間のつ罪と不幸の暗雲を払い除き、信じる者を死に

打ち勝たせる、救いの保証となりました。

このイエスと出会い、イエスを罪からの救い主と信じるなら、だれでもマリアのように変革され、生活に深みを持ち、喜びと平安と希望のある歩みへと変えられます。また、新しい命、すなわち、永遠の命にあずかる保証を得ることができ

「わたしは復活であり、命である。わたしを信じる者は、死んでも生きる。」(ヨハネによる福音書11章25節)

「わたしは世の終わりで、いつもあなたがたと共にいる」(マタイによる福音書28章20節)

と約束されました。イエスは、今も生きて働き、信じる者を救い、新しい命と活力を与える救い主です。イエスの復活した日曜日、は、礼拝の日です。一人でも多くの人が神を礼拝し、イエスと共に歩み、深みのある生活ができるよう、祈ります。

謹んで震災のお見舞いを申し上げます。

一日も早い被災者の方々の心の平安の回復と、被災地の復興をお祈り申し上げます。

(救世軍士官(伝道者))



男子社会奉仕センター

東京・杉並区に救世軍男子社会奉仕センターがあります。ここは「救世軍バザー場」として親しまれています。毎週土曜日のオープンの時は、開館前から、掘り出し物を手に入れようとするとる人々で、行列ができています。

この男子社会奉仕センターは、救世軍がその創業時から取り組んできたアルコール依存症者支援施設の一つで、その身体的・精神的回復を図り、社会復帰できるように訓練がなされています。飲まない日々を続け、社会復帰を目指している方々が働いています。

昨年十一月、この施設で職員として働いていた一人のアルコール依存症の方が亡くなりました。病床でクリスチャンとなったMさんです。



Mさんは、愛媛県松山市の出身。カトリック系のミッションスクールで中高一貫教育を受けました。東京工業大学に入学しましたが、中途退学。この頃からアルコール依存症などの問題を抱えるようになっていきました。

その後、設計建築会社にて約七年間勤務し、退社。郷里に帰って静養していましたが、友達の勧めで、アルコール依存症専門病院を受診し、入院となりました。

翌年、退院すると、依存症からの回復と社会復帰のため、救世軍男子社会奉仕センターに入所しました。断酒を守り、二年後にはその職員となりました。そして、バザー場での働きに従事する傍ら、AA（アルコール依存症からの回復のための自助グループ）に属し、

中心的なメンバーとして活動したのです。

しかし、九年後、退職してハイヤーの運転手となりました。が、再びお酒に手を出し、アルコール依存症の病気に戻ってしまいました。そして、男子社会奉仕センターに再入所となったのです。そのMさんをセンターの仲間たち、またAAの仲間たちは温かく受け入れ、助けました。Mさんは再起し、二年後には主任になりました。

しかし、現場責任者として采配を振るうようになって間もなく、間質性肺炎という難病の診断を受けたのです。予定していたAAのインターナショナルカンファレンスへの参加も、病気の進行のため断念。二度の入院を経て、平成二十三年八月、余命一カ月と診断され三度目の入院となりました。

十一月九日、転院先の救世軍ブース記念病院にて、イエス・キリストを信じ、正式に救世軍の信徒となりました。その十九日後、Mさんは静かに天に召されていきました。



救世軍は
四月二日〜八日を
酒害強調週間
として守っています

酒の害は計り知れません。飲酒運転、健康被害、またアルコール依存症などの社会的、健康的、精神的な害を私たちに及ぼします。

特にアルコール依存症は、飲酒が自分の人生に害を及ぼすことがわかっていても止めることができない病気で、病気の進行に伴い、この病気を否認し、再飲酒を繰り返す、家庭・地域・社会において自分の居場所を失い、孤独になり、ついには命を失うことになりま

すが、専門的な治療と適切な支援を受け、断酒することで回復する病気です。

救世軍は創立の当初から酒の害を訴え、禁酒を勧めてきました。現在、左記の施設でアルコール依存症者の回復支援の働きをおこなっています。

アルコール依存症者支援施設

自省館（救護施設）
生活の場を提供し、回復のために、個別支援計画に基づく生活及び自立支援をおこなっています。
TEL: 042-493-5374

男子社会奉仕センター
バザー場での作業を通して、身体的・精神的回復を図り、社会復帰できるように訓練をおこなっています。
TEL: 03-5860-2992

救世軍バザー場
東京都杉並区和田2-21-2
TEL: 03-58660-2992
交通: 東京メトロ丸の内線 中野富士見町下車徒歩10分

救世軍バザー場
江東出張所
東京都墨田区太平4-11-3
TEL: 03-3626-0738
交通: JR・東京メトロ半蔵門線 錦糸町下車徒歩10分

・新中古衣料、雑貨など掘り出し物多数。
毎週土曜日 10時〜15時
寄贈品受付、お問合せは
TEL: 03-58660-2992

AA 12のステップ

1. 我々はアルコールに対して無力であり、生きていくことがどうにもならなくなったことを認めた。
2. 我々は自分より偉大な力が、我々を正気に戻してくれると信じるようになった。
3. 我々の意志と命の方向を変え、自分で理解している神、ハイヤー・パワーの配慮にゆだねることを決めた。
4. 探し求め、恐れることなく、生き方の棚卸し表を作った。
5. 神に対し、自分自身に対し、もう一人の人間に対し、自分の誤りの正確な本質を認めた。
6. これらの性格上の欠点全てを取り除くことを神にゆだねる心の準備が完全にできた。
7. 自分の短所を変えてくださいと謙虚に神に求めた。
8. 我々が傷つけた全ての人々の表を作り、その全ての人たちに埋め合わせをする気持ちになった。
9. その人たち、または他の人々を傷つけない限り、機会あるたびに直接埋め合わせをした。
10. 自分の生き方の棚卸しを実行し続け、誤ったときは素直に認めた。
11. 自分で理解している神との意識的触れあいを深めるために神の意志を知り、それだけを行っていく力を祈りと黙想によって求めた。
12. これらのステップを経た結果、霊的に目覚め、この話をアルコール依存症者に伝え、また自分のあらゆることにこの原理を实践するように努力した。

〔Mさん追悼メッセージ〕

イエスの命が 現れるために

眞鍋精一



Mさんと私の関わりは一年に満たず、その関係は職場の上司と部下でした。私は救世軍杉並小隊の小隊長(牧師にあたる)ですが、彼が働いていた男子社会奉仕センターの施設長としての任務もおこなわせていただいているのです。しかし、形の上では上司と部下でも、それ以上に、お互い強く惹かれ合っていました。というのは、二人の話題はほとんど聖書の話だったからです。

男子社会奉仕センターは、毎朝、必ず朝礼といって、二十分ほどの礼拝の時間をもちます。これは、センターの働きにとって支柱となっているもので、開設から今日までの四十数年間、欠かしたことがない、大切なスピリチュアル・ケアの時間です。Mさんもこの時間を非常に楽しみに大切にされていて、

「この時間は、集団のスー

パーバイザーの時だ」と言っていて、喜んで耳を傾けておられました。

私が特に印象に残っているのは、

「一粒の麦は、地に落ちて死ななければ、一粒のままである。だが、死ねば、多くの実を結ぶ。自分の命を愛する者は、それを失うが、この世で自分の命を憎む人は、それを保って永遠の命に至る」(ヨハネによる福音書12章24〜25節)

という言葉に対するMさんの反応です。彼は中高生の頃、この言葉をずっと考えていたと言われました。

この言葉は、イエス・キリストが、救い主としての使命を全うする時が近づいた時に言われたものです。イエスの使命とは、私たちの身代わりになって、ご自身が罪人として十字架に架かって死に、罪の裁きを

受けて、三日目に復活することでした。一粒の麦とは、イエスのことです。イエスは、自然界において繰り返し返される現象に譬えて、ご自身の十字架の意味を語られたのです。イエスの死によって、その死の種がイエスを信じるすべての人々の命によりみがえり、実を結ぶという、霊的な奇跡が始まるのです。

昨年(2011年)の春先、四月、Mさんは気胸で二度目の入院をされました。その時、Podからダウンロードして、聖書―特にヨブ記を読まれたそうです。私が見舞いに行くと、突然、

「施設長、解きました!」とおっしゃいました。初めてヨブ記(旧約聖書に出てくる書名)を全部読むことができ、人生の疑問が解けた、ということでした。それ以上、話されませんでしたので、私もあえて聞きませんでした。

でした。しかし、このことが、彼が召天するまで大きな支えとなったことは想像に難くありません。

私は、これは「AA12のステップ」(2ページ下参照)に出てくる「ハイヤー・パワー」が聖書の神である、というMさんの信仰告白だと確信したので、クリスチャンとして救世軍の信徒となるよう勧めました。すると、

「わかりました!」

と二つ返事で、承知されたのです。非常に慎重な性格のMさんにしては、意外なほどあっさり同意されたので、かえって驚いたことを覚えていきます。

Mさんが救世軍の信徒となることを決心して最初に言われた言葉は

「小隊長!」

でした。これまで、「施設長」とは呼んでも、「小隊長」と呼ぶことはありませんでした。私はそこに、彼の信仰を見たように感じ、非常にうれしく思いました。上司と部下ではなく、主にあって兄弟の関係になれたことを喜びました。

こうして、Mさんの希望で、男子社会奉仕センター隣りにある救世軍ブース記念病院に転院してから、病床で兵士入隊式(救世軍の

信徒として正式に加わることを表す儀式)をおこないました。そして、十一月二十八日、「自分は、備えられた所に行くのだから、何の心配もない」との言葉を遺し、Mさんは天に召されました。勝利の凱旋でした。

「わたしたちは、このよいうな宝を土の器に納めています。この並外れて偉大な力が神のものであつて、わたしたちから出たものでないことが明らかになるために。……わたしたちは、いつもイエスの死を体にとつています。イエスの命がこの体に現れるために。」(コリントの信徒への手紙二 4章7、10節)

「土の器」は、もろく、欠けやすい素焼きの器のこととで、私たちの肉体・人生



を指します。私たちは、病気になるりますし、衰えていきます。そして、いずれ死を迎えます。また、様々な試練に耐えることが困難で、罪を犯し、人生を台無しにしてしまうこともあります。しかし、私たちがイエスの死をまとう時、私の弱さ・死が、私たちのものではなく、イエスの弱さ・死に変わるので、その時、何が起きるのでしょうか。私たちのうちに、イエス・キリストの復活の命が現されるのです。罪に勝ち、死をも滅ぼした復活の命が、信じる一人ひとりに与えられる―霊的な救いが起こるのです。

これが、Mさんが「解けた!」と言った意味ではなかったか、と思っています。

(救世軍士官 (伝道者))

*ヨブ記―信仰心篤いヨブが、大きな試練に遭う中で、神の臨在を経験し、頭の理解を超えた神の力の前に悔い改め、真に「神に信頼する」者に変えられる物語。

クリトリ
ご氏名
ご住所
この部分を封書か葉書に貼り、裏面下の救世軍にお送りください。